植物と暮らすミャンマー 2 ： 包み結わく

ミャンマーの村落では、モノを包み結わくのに植物の葉や軸がまだまだ使われている。包装材の代表はバナナ（ビルマ名：Ngetpyaw）の葉である。うまく包めば水気や油が滲出しない上、殺菌や防腐効果があるともいわれ食品を包むのにはもってこいである。日本ではササの葉とイグサを使う粽に、エーヤワディーでは湿地に育つクズウコンの仲間／*Phrynium pubinerve*（Taungsin-phet）の葉が使われていた。40 cm 以上の楕円形の葉でもち米を器用に包み、長い棒状の葉軸で端を留める。若葉が野菜にもなるシダの仲間／*Stenochlaena palustris*（Damin-nwe）の軸や、マングローブ林の近くに生えるオオハマボウ／*Talipariti tiliaceum*（Thinban-shaw）の樹皮繊維は、強靭な紐になる。風呂敷のように使われるのが、高木のフタバガキの仲間／*Dipterocarpus tuberculatus*（In）の葉だ。長さ 50 cm にもなる大きな葉は、屋根や壁を葺く材料にもなる。これらの植物材料は、役目を終えて燃やしたり投棄したりしても、環境負荷は皆無だ。身近な植物で包み結わく村の暮らしに、ミャンマーの生活文化の一端が垣間見られる。

（大野勝弘）

In の葉で包まれた野菜を持ち帰る娘。
ヤンゴンからトワンテーへのバスで（2014.10.26）

柵を Damin-nwe で留めて修繕する。
エーヤワディーデルタの村（2010.9.4）